

一物の見方、考え方— 経営に生かす仏教哲学

青木伸雄

1. まえがき

変化を知り、変化を生かすということで書き続けているが、国債格下げというニュースがメディアに登場、変化に直面（米格付け会社スタンダード・アンド・プアーズ（S&P）社の日本の長期国債の格付は、上から4番目に下げられてしまった）した。

その原因は、高額な債務残と財政赤字に「政治に展望描けず」という評価がついている。

我が国は、どうも財政健全化の目標に対し、参成、不参成の対立、私利私欲の戦いで先がみえないらしいのが対外評価である。

そこで、何んでも反対の私利私欲でなく、今、何をなすべきかを考え、難局に如何に対応するかということで、「禅の源流、精神を学ぶ」で人生そのものの生き方を考え、「スパルタ教育を考える」で、補助金や援助等にたよる受け身の考え方や対応でなく、積極的に攻める考え方を学び、「空有不二と中道を学ぶ」で難局への対応の実践にあたって、如何に両極端に走らずに物事を解決すべきなのか、その手法等について考えてみることにしたい。

我が国は、この現状を国難と考え、国民が一体となって脱出するための努力が必要である。

国債格下げという変化の先には、環太平洋経済連携協定（TPP）参加の問題も、新しい国際ルールの変化という流れでせまってきている。

これからは、変化を全て己れに対する試練だと考え、謙虚に勉強し、考え、他人事とはせず経済活動の大転換の渦の中にのみこまれることなく、マイナス志向ではなく、常にプラス志向で世界に向かって攻めの姿勢が必要であると愚考する。

2. 「禅」の源流、精神を学ぶ

一般に「禅」といえば、心を安定、統一させることによって宗教的叡知^{えいち}に達しようとする仏教の修行法、禅定（宗教的な瞑想^{めいそう}）をさしているが、その源流ともいえる中国禅の物の見方、考え方を学び考え、混迷する世の中に、今、何が必要なのか考えたい。

仏教辞典等によると釈迦（釈尊）以前に古くからインド人は、心を一つの目標物にそそいで、心が散ったり乱れたりすることを防ぎ、心の統一と安定をはかり精神統一をする習慣を伝えてきていた。その起源は、遠くインダス文明にまでさかのぼると考えられている。禅は当時の中国において、特異な発達をとげ禅宗という宗派まで生みだし、我が国にわたってさらに深められ、精神統一の修行は重要視されるようになったと考えられている。

インドの菩提達磨によって521年（527年説あり）に中国へ伝えられ、五祖弘忍の門下、六祖慧能によって南宗、神秀によって北宗の二派が生じた。

慧能のもとから青原、南嶽の両系がでるが、前者が曹洞宗となり、後者が臨済宗として、中国江南の他に勢威をふるったので南宗禅といわれている。

ただ、禅宗という語は六祖慧能から半世紀以後800年後からあらわれ初期の頃にはみられない。

六祖慧能の教えは「以心伝心」、少し進んで「教外別伝」、「不立文字」、「直指人心」、「見成成仏」を主張、頓語主義（修行の段階をえずに、一挙に悟りを開く考え方）として大成された。

この頓語主義の奥義が、中国唐時代の明道玄覺の「証道歌」（1814字247句）の詩のなかにみられる。

そのなかに、「行亦禅、坐亦禅、語黙動静、体安然」という教えがある。

その大意は、「行動するも禅、座するも禅、話し語るとき黙するとき、体を動かし休むときも禅である。禅は身心を安泰にさせる」ということである。

要は、人生そのものが「禅」の修行であるとし、人生に対するとりくみ方に、全身全霊であたり、逃げずにたちむかうこと、いわゆる精進する姿勢こそが「禅」そのものだとといたのである。

教えそのものを「教外別伝」、「不立文字」とし、強い忍耐力と精神力を求め、挑戦し努力する心を求めたのである。

このように学び考えた場合、はたして人間として正しい生き方をしているのか謙虚に反省する必要があるのではないだろうか。自から積極的に難局に対応し我欲を捨て去る姿勢が重要である。

著者：広島大学生物生産学部講師
元近畿大学産業理工学部客員教授
日本禅画家協会名誉理事
中国少林書画院名誉教授
法号位 法印 禅画位 奥伝
青木伸雄
釋 禳 禪（野風生）
雅号 樹泉